

JSA 京都支部ニュース 9月号に掲載(9月14日発行予定)

「放射線を浴びたX年後 III サイレント・フォールアウト 乳歯が語る大陸汚染」上映会の報告

前田耕治

8月23日18時30分より、核兵器廃絶ネットワーク京都が主催する表記映画会が龍谷大学響都ホールで催された。参加者は70名であった。

冒頭、映画制作のためのクラウドファンディングに参加した「京都被ばく二世・三世の会」の平さんより、上映会の趣旨説明がなされた。本映画は「放射線を浴びたX年後」シリーズの3作目であり、第1作は愛媛のローカルテレビ局のドキュメント番組をもとに映画化され、2012年に公開された。つづいて第2作が2015年に公開された。今回の第3作は、過去の2作と違って、劇場公開はされず、クラウドファンディングを募って、自主上映という形で普及を図っているとの説明がなされた。また、その上映の場でのカンパによってさらに上映の場を広げるというスタイルを取っているという理由から、参加者にカンパの協力が呼びかけられた。終了後には48名からカンパが寄せられた。

さて、映画の内容であるが、過去2作はいずれも、太平洋で繰り返される核実験の被ばくが第五福竜丸の船員だけにとどまらないという、被ばくの広がりの実態を告発した映画であった。これに対して、第3作は、日本の漁師たちの被ばくの実相から、アメリカ国土での核実験とその被ばくの実態に大きく視点が移された。カメラやマイクをもってアメリカ各地やイギリスなどで取材をする制作スタッフの様子も映されていた。

ネバダ核実験場の近くの町、ソルトレークシティやセントジョージでの被ばくの被害者のインタビューが次々と映されて、赤ちゃんから高齢者まで家族全員がガンでなくなった一家の話など、悲惨な実態が明らかにされた。そのとき、南方のラスベガスでは、核実験のきのこ雲を見物する観光が名物となっていたというのはいかに市民レベルで放射能に関する知識が欠如していたかを表している。

ところが、被害はネバダ周辺だけではなく、繰り返される核実験場から放出された放射性物質が毎回どこを拡散し降下したのか、その「軌跡」がマップ化された。その結果が衝撃的であった。その軌跡はアメリカ全土にわたり、とくに複数の実験により同時に放射性物質が降下した部分、いわゆるホットスポットを黒くマークした地図を見ると、ネバダ周辺だけではなく、全土に広がりアメリカ東部にまで及んでいることが一目瞭然であった。

そのなかで、全米の牛乳が放射能に汚染され、子どもたちが被ばくしているという不安が広がり、その証明のために、ある母親研究者が仲間とともに、乳歯を集めてストロンチウム90を測定するという活動がセントルイスで始められた。約6万本の乳歯を解析した結果は、雑誌Scienceに1961年に掲載され、科学的に子どもの被ばくが証明された。その研究がケネディ大統領を動かし、大気圏核実験が中止されるという成果につながった。その女性研究者宅にケネディが電話をして、子どもが電話を取り次ぐというシーンがリアルであった。最終的に集まった乳歯の数は32万本、提供者のインタビューが当時の母親の思いを代弁していたのが印象的であった。そのほか、クリスマス島核実験でのイギリス兵士の被ばくの取材など、世界中に被ばく者は広がっている様子も映された。

筆者の感想としては、自ら核兵器を開発し、核使用や核実験を繰り返し実施したアメリカが加害者であるだけでなく、自分の国土を放射能で汚染し、自国の国民までも被ばくさせた事実を、多数の証言をもって映像化したこの映画が日本だけでなく、ぜひアメリカはじめ世界中で上映され、核廃絶への流れを促進することを期待したい。